樋口一葉と渋谷三郎

青木一男

一

「没落と背信」、なんと不愉快なことばであろうか。そしてまた、なんと通俗小説のテーマに似たことばであろうか。しかし、これは半ば言い当てたことばではある。これは、一葉樋口奈津の父則義が没したとき、一葉の婚約者ともいうべき立場にあった渋谷三郎が一葉から離れていったことを言っているのである。和田芳恵氏は『〈講談社現代新書〉樋口一葉』の中で「3——没落と背信」の項を設けて、次のように述べている。(注1)

明治二十二年（一八八九）七月十二日、則義は失意のうちに死んだ。このとき、数えの十八歳、妹のくには十六歳であった。

死期がせまったと感じた則義は、渋谷三郎を枕もとに呼んで、なつの婿になって、樋口家を継いでもらいたいと頼んだ。則義を安心させるつもりで承諾したが、ほんとうは妹のくにを三郎が好きだったという。これは後年になってからの三郎の話だから、あまり当てにはならない。

三郎は学校の成績もよく、青雲の志を抱いていた。立身出世のためにも、よい条件のところから妻を迎えたい気持であった。

則義が生きていたころは、無理に門戸を張っていたが、内情がはっきりすると三郎は手を引いて、一方的に婚約を解消した。第三者の立場で見て、三郎ばかりをせめるのは酷だという気がする。

和田氏によれば、樋口家の没落を見て、渋谷三郎は婚約を解消した（つまり背信）。しかし、第三者からみて、一方的にせめるのは酷だというのである。

このことに関し、小野芙沙子氏は次のように解説している。(注2)

生家の没落と共に、一葉にひとしお零落意識をかきたたせたものに、もう一つ、こんな事件があった。郷里の先輩真下専之丞の妾腹の孫、渋谷三郎との婚約破棄事件である。

一葉の父は、この渋谷三郎を見どころのある青年だと可愛がり、何となく将来結婚させたらと思いながら交際を見守っていた。一葉自身もにくからず思いながら、邦子と三人で、寄席に行ったり語り合ったりしていたのだった。父はこのことを気にかけながらも、婚約が成立しているのも同然と思っている中に、急に死んでしまったのである。その後しばらくしてからこの話が具体化し、どう思うかと母親から聞かれた一葉は考えるまでもなく承諾したのだった。ところが没落しつつあった一葉一家をみて、三郎が答えをしぶるようになり、不愉快なことがかさなり、ついに破談になっ

てしまったのである。

小野氏の書は「一葉入門」の教養書であるが、それだけに多くの研究者たちの意見を取り入れ、一葉の日記の中にあった述懐を下敷にした文章である。しかし、このとおりを信じてしまうと、三郎は没落したフィアンセを見捨てて逃げたいやな男になり、一葉は捨てられて男を恨み続ける、みじめな女になってしまう。

真面目で前途有望な書生を未来の夫と心に決めていたの娘には、父の病死後間もなく婚約解消という現実にあって、男性不信、いやそれ以上に世の中に対する絶望感を味わったことは十分に推察できるのである。婚約解消の事情がなんであったにせよ、直接には渋谷三郎に対する恨みとなって、心に残ったことであろう。しかし、右にあげた二著に言うように三郎に一葉を裏切る心があったか。また、樋口一家がずっと三郎を恨み交際を断ったであろうか。――現に樋口家は三郎とその後も親戚並[注3]の交際を続けているのである。小論のテーマを最初に明かしてしまえば、樋口家と渋谷三郎との交際の状況を明らかにして、渋谷に対する非難にささやかな弁護をし、さらには一葉は婚約者に捨てられた気の毒な女ではなく、みずから女流文学者としての道を選んだ新しい女であったことを述べたいと思う。

二

明治二十九年十一月二十三日、樋口一葉は数え年二十五歳の若さで、天与の才を惜しまれつつ世を去った。「ひそかに女史の生涯を考ふるに天の二物を与へざる之を如何ともすべからずといへども何ぞ其の才を稟くるの豊にして其福を享くるの少きや蓋し数奇にして命の薄き女史の如きも亦稀なり。」と幸田露伴をして嘆かせた[注4]。一葉の死は苦労の末に文壇に認められた彼女にとって不幸であったばかりでなく、これからの活躍を期待していた江湖を悲しませるものであった。以来、一葉は、清貧にたえて母と自分と妹の三人の女世帯をはって、ひたすら懸命に文学の道を進んだ女流文学者として、例の下村為山の描く一葉像のごとく、清純で、きりりとして、しんの強い、どちらかと言えば「古い日本の最後の女性」といったイメージを残した。こうした一般的な一葉観[注5]の流布する中で「三人の恋人」なることばが現れた。

「三人の恋人」とは、新潮社一時間文庫の一冊『樋口一葉』[注6]の冒頭の章名である。「一葉に三人も恋人がいたのですか。」とある人が驚いて私に問いかけたことばが忘れられないが、清純な士族の娘というイメージからはよほど遠いことばである。

和田芳恵氏は「三人の恋人」の冒頭から次のように書いている。

一葉が残したおびただしい草稿を読んでゆくと、考えに疲れ、思いにくれたときの、ふとした落書がある。その中に、きまって出てくる実在の男性の名は、半井桃水と渋谷三郎、それに野尻理作。べったりとした筆の跡は、なやましく一葉の思いを伝えて、見る人の胸を打つ。

思わぬところで人間は本音をはくものだから、これが青春のなかった樋口一葉の思いを伝えて、見る人の胸を打つ。

右の三人の中の半井桃水は小説の師であり、熱い思いを寄せていた男性であった。渋谷三郎は、一葉の父が晩年彼女の婚約者と考えていた人。野尻理作（戸籍では利作）は山梨県東山梨郡玉宮村の作り酒屋の息子で、一葉の父則義の監督下に東大に学んだ人。和田氏によれば、野尻家には、一葉が理作を愛していたとの言い伝えが残っているそうである。以上のようなところから、和田氏は「三人の恋人」という標題をつけられたのであろう。(注7)

塩田良平氏は、このへんの事情について、

野尻理作は、…(中略)…一葉姉妹の少女時代の友達であり、今は甲陽新主幹。よこした手紙の文面から察して、一葉に敬意を払っていたことはわかるが、渋谷にせよ、野尻にせよ、そこはかとない異性への思ひはもっていても、思慕の対象とまでは行かなかったであろう。…(中略)…一葉がふと書きつけた落書、そのまはりは真黒に墨で消されて、三郎と理作だけが浮び出ている。落書は、重大な心理ととればとれるが、恐らくこの時は、桃水にからまる思ひ出の切なさから安全弁として連想されたものにちがいない。人が人の思ひに切なるとき、ふと何の関係もなく、淡い他の人の思ひ出をなつかしく思ひ出すことがある。この落書もその意味であったろうし、渋谷の夢もそのやうな程度のものであったろう。

と述べられている。(注8)

和田氏は「三人の恋人」と言い、塩田氏は「はかない」「淡い」思いの人としている。私は、この両氏の見方の内実がそれほど離れているとは思えない。よし、かりに額面通りの違いがあったとしても、一葉の思いは青春のたゆたいとでも言うべき状態にあったのではないかと思うのであるが、いかがであろうか。若者たちは、いつも自分の周囲の若者たち、とりわけ異性に対しては敏感な触手を出したり縮めたりしながら生活しているのだから、後世文豪の名で呼ばれるようになった一葉だとてそういう精神生活があったろう。一葉と三人の男性を、非常にデリケートな情緒をもった娘とそれをめぐる青年たちとして私はみたいのである。

三

明治二十五年八月二十二日の一葉の日記はたいへん長く、次のことばから始まっている。

二十二日、晴天。菊池の老君遊びに参らる。終日談話。久保木及び藤田屋の息子来る。夜に入りてより突然、渋谷君来訪。「暑中休暇にて帰郷したるなり。」とか。〈日記①〉

父則義が死に、その後渋谷との婚約が解消してから、ざっと三年後のことである。この間の一葉の跡を振り返ってみよう。

明治二十二年（一八八九年）　数え年十八歳
九月　芝区西応寺町六十番地の次兄虎之助方に転居。
明治二十三年（一八九〇年）数え年十九歳
一月　邦子の奉公口を探す。
五月　萩の舎（歌塾・中島歌子主宰）に寄宿。小間使い同様に使われる。中島歌子、一葉の家庭の事情に同情し、女学校の教師に推薦しようとしたが、実現せず。
九月末　母と一葉と妹、本郷区菊坂町七十番地に転居。裁縫や洗い張りで生計を立てようとする。

明治二十四年（一八九一年）　数え年二十歳

一月　「かれ尾花　一もと」執筆。作家として立つことを決意。

四月十五日　妹の友人野々宮きくの紹介で、朝日新聞の小説記者半井桃水の門に入る。やがて桃水に好意を寄せるようになる。

十月　鶴田たみ子が生んだ子の父親は桃水だと聞き、ショックを受ける。(注9)

十一月　「森のした艸　一」執筆。このころ「一葉」と号した。

明治二十五年（一八九二年）　数え年二十一歳

二月　雪の日に桃水を訪ね、「雪の日」着想。

三月　萩の舎の塾生田辺花圃や田中みの子らと塾の改革を計画する。桃水、文学雑誌『武蔵野』創刊、一葉同誌に「闇桜」発表。

四月　『改進新聞』に「別れ霜」（ペンネームは、浅香のぬま子）、『武蔵野』に「たま襷」発表。

五月　菊坂町六十九番地に転居。

六月　桃水との交際についての風評が高くなり、歌子の指示で桃水と一応絶交することになる。

七月　「五月雨」を『武蔵野』終刊号に発表。

八月　渋谷三郎来訪。

九月　「経つくえ」を野尻理作の『甲陽新報』に発表。

これでわかるように、父親没後の生活苦・兄との同居と失敗・お針と洗濯で細々と暮らそうとの決意と実行・生活のために小説修業・小説の師桃水への慕情から絶交へ、こうしたことが三年間に相次いで起きていた。しかも今は恋しい桃水と交際を断つと決意しつつも、心の整理のつかないころであった。そこへ渋谷が訪れたのである。

さて、渋谷三郎は、前にあげた和田氏や小野氏ばかりでなく、多くの研究者や評論家の著述を見ても、婚約解消以来、悪者扱いされている。したがって、渋谷と樋口家とはきわめて悪い関係になったように思うが、実は婚約解消後も無縁ではなかったのである。

父君が一周忌の折、心がけて訪ひよりたる。新年の礼かかさぬ事、任官して越後へ出立せんといふ時まで我家にかならず立よりなどするからに、是れよりもうとみあへず、彼より文来たればこなたよりも返し出しなど親しうはしたり。〈日記②〉(注10)

と一葉が回想していることからも、前述したが親戚並の交際はしていたとみてよいだろう。和田芳恵氏は

それまでの日記の中では、夏子から三郎は素知らぬままに放置されていた。思い出してはいたらしいのに、日記に書こうとしなかったのは、夏子の強い気象のためである。（新潮社・一時間文庫）

と書いている。たしかに、一葉は気も強かったし、自分を棄てた男のことを日記に書きたくなかったという解釈も成り立つが、実は多少違った事実もあった。明治二十五年一月の日記に、

四日。曇天。年頭者は藤田君、菊池君のみ。野尻君、渋谷君より年頭状着。野尻君にはすでに差出したればよし。渋谷ぬしは、こぞ赴任以来住家知れ難く、さりとて人にとはんも少しの間わるきに、思ひながら不沙汰したるに、先よりはこと更に年賀いはれたる、答礼せずはとて直に返事を出す。〈日記③〉

とある。これによれば、一葉自身、野尻同様に渋谷にも早く年賀状を出したかったが、新潟赴任以来住所不明で、他人に聞くのも間が悪かったので、そのままにしておいたのであった。他人に聞くのをためらうあたりに、まだ婚約解消事件にこだわっているところもあるが、ご

く普通の交際をすることは十分できる状態だったのである。

八月二十二日の日記はたいへん長いもので、〈日記①〉に続いて次の文が続く。

種々のものがたりす。我小説ものする事、三枝君より伝へ聞きたりとて、其よしあしなどいふ。「猶つとめ給へ。潔白正直は人間の至宝なり。是をただ守らば何時かは好時逢はずやある。我其かみの考へには、君の家かくまでにとは思はず、富有と計思ひしかば、無理をいひたる事も有し。今はた思へばいと気のどくに、心ぐるしさたえ難し。もし相談したしと思ふことあらば、遠慮なくいひ給へ。小説出版などの為に費用あらば、我たてかへ申べし。又、春のやなり高田なりに紹介頼みたしとならば、我明日にも其労は取らん」などかたる。半井ぬしのこと、かく〳〵と我もいへば、「夫は勉めてさけ給へ。いづれ恩も有べし、義理も有らんが、夫につながるゝ末いとあやふし。正当の結婚なさんとならば、止むる処なけれど、浮評といふものはあしき事也。潔白の身にもしみつかば、又取かへしなかるべくや。兎角君は戸主の身、振りかたも六ツかしからんが、国殿は他へ嫁し給ふ身、あたら妙齢を空しう思し給ふな。我もむかしは書生上りの、見る処少なく思ひ広くして小説にいふ空像にのみ走りたれど、今は流石によの風しみこみて、老人めきたる考へにも成たり」などかたる。（下略）〈日記④〉

渋谷三郎は新潟県の検事として赴任していたため、一葉が東京で小説を書き始めたことも知らなかったのであるが、今回上京し、親戚の三枝信三郎から一葉が小説を書いていることを聞いたのであろう。それで、小説を書くことを激励し、桃水との交際をとめている。

私がこの日の日記を読んで注目するのは、三郎が、

我其かみの考へには、君の家かくまでにとは思はず、富有と計思ひしかば、無理をいひたる事も有し。

と率直に述べている点である。一葉は貧しい生活の中で一生を終えた人のように思いがちであるが、すくなくとも父が事業に失敗するころ（明治二十二年二月、数え年十八歳）までは、庶民感覚からすれば内福な家庭のお嬢さんだったのである。父は勤勉な性格の上、蓄財の才があり、公職のかたわら不動産の売買や金融にも手を出していた人である。名門の令夫人や令嬢の集まる歌塾萩の舎の発会に新調の晴れ着を身につけられず、「身のふる衣」を十六歳の一葉は嘆いたけれど、上流社会の女性の通う歌塾の一員であるだけで、樋口家をお金持とみたとしてもおかしくはなかったろう。（今日でも校名を聞いただけで、あのお嬢さん学校へ通うくらいだから、よほど良い家庭の娘さんだろう、などと言うのと同じである。）

渋谷三郎は、今さら述べるまでもないが、一葉の父則義が甲州から江戸へ出たとき同郷の先輩として頼った真下専之丞の妾腹の孫で、後に坂本勝之丞（真下の妾腹の子）の跡を継いで坂本姓を名乗った。決して欲に目がくらんで金持の養子になったわけではない。三郎は東京専門学校（早稲田大学の前身）で法律を学び、司法官を経て、後年山梨県知事や早稲田大学法学部長を歴任している。

この三郎と一葉の初対面は、三郎十九、一葉十四のときであった。

我十四の時、この人十九成けん。松永のもとたてはじめて逢ひし時は、何のすぐれたる景色もなく、学などもいと浅かりけん。思へば世は有為転変也けり。〈日記⑤―①と同日の日記〉

と一葉は回想している。裁縫を学ぶために通っていた知人の松永政愛

の家で、その家に出入りしていた三郎に引き合わされ、知り合ってみれば三郎の祖父[注11]と一葉の父は深い交際をしている仲であり、しぜんと三郎は樋口家に出入りするようになっていった。ところが、一葉の長兄泉太郎が病死し、一葉が戸主となって婿養子を迎えることになった明治二十一年のころ、父は三郎に婿養子になる意志を尋ねたところ、

其答へあざやかにはなさで、何となく行通ひ、我とも隔てずものがたらひ、国子と三人して寄席に遊びし事なども有けり。〈日記⑥〉[注12]

というような様子で、暗に三郎は承知したようであった。父則義は少年時代には農民運動にも参加しながら、今は法律の勉強にうちこむ三郎青年をよき婿がねとしてながめ、仕事には失敗したものの、娘のこと跡継ぎのことは安心して死んでいったのである。ところが則義の没後、樋口家再建のため、娘の縁談を進めようと思ったのであろう。母から縁談が改めて切り出されたのであった。

ある時、母より其事懇にいひ出して、「定まりたる答へ聞まほし」といひしに、「我自身はいささか違存もあらず。承諾なしぬ」といへり。母君悦びて、「さらに三枝に表立ての仲立は頼まん」といひしに、「先しばし待給へ。猶よく父兄とも談じて」とて、その日は帰りたき。事いかなるにか有けん、其後、佐藤梅吉して怪しう利欲にかかはりたることいひて来たれるに、母君いたく立腹して、其請求を断り給ひしに、「さらば此縁成りがたし」とて破談に成ぬ。我もとより、是れに心の引かるるにも非ず、さりとて憎くきにもあらねば、母君のさまざまに怒り給ふをひたすらに取しづめて、其ままに年月過ぎにき。されども彼方よりも往復更にそのかみに替らず。〈日記⑦—⑥の続き〉

右の日記は、明治二十五年九月一日付のもので、八月二十二日に渋谷三郎が訪問してから、十日ほど後のものである。この日、一葉の母が山崎正助方に借金（十円）を返しに行ったところ、「渋谷三郎君を我家の聟に周せんせばや。もしは嫁に行き給ひてはいかが」と言われ、母は即座に断わって帰ってきたということがあり、このことに触発されて、父の晩年三郎との婚約の話があったことや破談になったことが書かれ、続いて右の記事があるのである。山崎は真下家との関係から知り合った同郷人で、樋口家と親しく、しばしば金を借りている相手であり、渋谷も親しく出入りしていたのである。

一葉たちは、母親の報告を聞いて、「世はさまゝ也」と一笑に付している。一葉もこの時点では、さっぱりと渋谷との復縁の希望は捨ててしまっているように見える。けれども、昔のできごとを長々と回想していることからみると、一葉としては一笑に付しただけでは済まされなかったのではないか。今まで日記にも書かないでいた複雑な思いを、日記に書くことによって清算したかったように思われる。

四

ところで、前の日記に、

其後、佐藤梅吉して怪しう利欲にかかはりたることいひて来たれるに、

とある部分であるが、これは三郎訪問のときの彼のことば

我其かみの考えに、君の家かくまでにとは思はず、富有と計思ひしかば

無理いひたる事も有し。

と符合する。三郎が婿養子に入るについて、かなりの結納金でも要求してきたことを想像させる。[注13] このことは樋口家側から見れば、ひどい要求と思えたろうし、この事実が、後々樋口家が没落したとみたら縁談を断わってきた薄情者と言われる根拠になったのである。

一葉崇拝者から三郎がきらわれた話にこんな例がある。

始めての記念碑が大藤村に建ったとき、参列した旧姓渋谷の坂本三郎が文学者達から殴られそうになった事件がある。邦子の気転で事なく済んだが、親族席に着き、悪い意味の政治家らしい自己宣伝の講演が、生前の一葉と親しかった連中の反感を買ったためだが、いちばん親しく古い知人の出席者でも、婚許時代の三郎とは違っていなかったのだから、怒りの源は「日記」の中にあったわけで、やはり日記をその儘に受けとったものと考えられる。〈新潮社・一時間文庫　和田芳恵〉

この殴られそうになった事件は有名で、いろいろの文献に見えるが、三郎を悪者としたのは、この九月一日の記事であった。

しかしながら、渋谷三郎ないしは三郎側の人々は、ほんとに欲ばりの不人情者であったろうか。私は一葉のためにも否と言いたいのだ。明治二十一、二年ごろ、高等教育を受けていた者が同世代の何割いたろうか。しかも苦学同然の状態で東京専門学校へ通っていた、[注14] 前途有為の青年を婿に出すとしたら、当人の将来に対する保証を求めるとか、応分の結納金を求めるのは当然の話であろう。特に仲人役になる人は、三郎自身や渋谷家の利を考えて奔走してもおかしくはない。一方、樋口家は父則義が事業に失敗した後間もなく病死して破産状態だったから、先方としては当然な申し入れも当然とは受けとれず、すくなくとも当座は三郎を裏切り者と決めつけてしまったのである。これが、あと何年か後であれば、三郎も一葉も精神的にも肉体的にも大人になっており、自分たちの考えを強く主張した形で、この縁談を処理できたものと思う。

一葉は親の決めようとした婚約であったから、渋谷との破約で失望は薄かったと思うが、男性不信、口約束のはかなさ、無念さが心に残り、彼女の人生観の中に組み込まれていったようである。では、この無念さゆえに渋谷への恨みは消えず、渋谷と絶交してしまったかというと、前述したように、三郎は則義の法事に列席したり、年始の挨拶も欠かさず親戚並の交際を続けたのである。こういう点をみると、三郎は婚約解消についても悪びれておらず、また、明治二十五年八月の訪問でも誠意のある話をしていることからも、決して悪人とは思えない。

再び八月二十二日の訪問のことにもどるが、一葉日記によれば、小説修行を励ましたあと、小説出版の費用を立て替えてもいい、春のやなり高田になり紹介してもいい、半井桃水との交際はつとめて避けよ、結婚する気ならとめないが、潔白の身にしみがついたら取りかえしがつかない、と言っている。また、一葉が近眼だと言えば、明日また来るから医者へ一緒に行かないかとか、『都の花』へ投書したら一冊送ってくれ、写真があったらくれないかなどと言い、「とかくは潔白の世を過し給へ」と言っている。これに対し一葉は、「決してにご

りにはしまじと思ふなり。渋谷様、此次参り給ふ頃は枝豆うらんか。新聞の配達なさんか知られ侍らず。其時立ち寄らせ給ふや。」と笑っている。渋谷は「必ず立ち寄らん。」と言い、近眼を心配しつつ十一時ごろ辞去している。しかも、翌日の午前中に、大隈重信・前島密・鳩山和夫を訪問した帰りだと言って、菓子を土産に再訪している。そして、「昨夜『むさし野』を買おうとして絵双紙屋をたたき起こして雑誌を買ったが、『吾妻にしき』だったので、これから取り替えてくる。」などと話し、これから山崎へ寄ると言って昼前に帰って行った。一葉の小説が載っている雑誌を買うために十一時過ぎに本屋を起こしたり、名士への挨拶の道すがらまた立ち寄っているあたり、樋口家への思い入れもひとしおのものが感じられる。

また、大隈・前島・鳩山はいずれも東京専門学校の関係者であるが、これらを歴訪しているあたり、青年には珍しい世渡り上手とも見られるし、母校の恩師への義理堅さとも思える。また、当日は佐藤梅吉や山崎正助をも訪問しているようであり、そういう多忙な日程の中で旧知を訪問しているところなどからは、義理堅い天性を知ることができる。

その後、九月一日に母が山崎方を訪れて、渋谷との復縁話が持ち出されたのだった。そう言えば、先日訪問の折も三郎の態度に怪しいそぶりがあり、それが自分との婚約を元へもどしたい気持の現れだったのかと一葉は思ったりした。三郎の話を聞いて一葉一家は「世はさまざま也」と笑ってしまった。一葉もすでに文筆によって立とうとしているから、三郎の申し出を断わったことに異存はなかったろうが、心の中は母や妹と同じであったとは思えない。婚約が破れたときのことから、その後の渋谷との交際のこと、今回の三郎の申し入れについての思いが去来したのである。そして、彼の申し入れに従えば、正八位、月俸五十円の検事の妻となって、亡父や母兄妹たちの名も辱めず、家もみごとに立つかもしれぬが、それは一時の栄、「もとより富貴を願ふ身ならず、……世の中のあだなる富貴栄誉うれはしく捨てて、小町の末我やりて見たく」彼の申し入れを断わる決意を固めたのだ。この日は、物思いの果てに「今日はいとものうくて、何事もなさずに日を暮しぬ」という状態であった。

五

ここで、三郎の求婚の意図を考え直してみよう。父病没直後と現在とでは樋口家の様子は一変している。樋口家の衰微ははっきりしている。一葉はその中で作家への道を歩き始めたが、まだ今のところ、やっと同人誌に何回か作品が載ったくらいのところ、それに作家の社会的評価は今から想像つかぬ低さである。一方の三郎は司法官として着実な地位に就いている。名家の令嬢との結婚も可能な身の上である。とすれば、三郎の求婚を新進作家の仲間入りをした一葉を見て心が動いたとみるのは不適当だろう。第一、まだ新進作家の列には入っていないのだ。もちろん、三郎に和歌や小説に才のある女を妻にして誇り

たい気持がなかったわけではあるまい。しかし、それをさげすむべきではないだろう。それより、むしろ、才能はあるが、貧しく暮らしている旧知の娘の美点を見つけて、自分の意志から発して求愛しているとみてよいと思う。三年前には自我の確立もなきままに、周囲の身寄りなどの意志のままに婚約は破棄され、今は三郎自身の意志で結婚を望んだものの、一葉の決意によって結ばれることなくして終わってしまった。当時の一葉の胸中には半井桃水の面影のほうが強烈であり、今は新しい愛を求めるより、文学の道に没入して桃水を忘れることが先だったのかもしれない。

明治二十七年十二月に「大つごもり」を書き、明治二十九年一月に「たけくらべ」を完成させた十四箇月を「奇蹟の期間」とか「奇蹟の十四箇月」とか呼んでいる。一葉が美しく燃えた期間である。

求愛を断わって後の一葉日記から、渋谷の記事を抜いてみよう。

○昨夜渋谷ぬしを夢む。(明治二十六年三月一日)
○坂本君より状来る。新発田区裁判処之判事に成けるよし。(明治二十七年一月十六日)
○この夜、新がたの坂本ぬしより賀状来る。これよりはまだやらざりし也。(明治二十八年一月三日)
○けふ、思ひがけず坂本君来訪。(明治二十九年七月十二日)
○けふ、坂本の三郎ぬしより写真とどきたり。(同年同月十八日)

三郎のことが書かれている最後のころの七月には、一葉の病気はかなり進んでおり、八月になると、すでに絶望が宣告され、十一月二十三日に一葉は没した。それから一年二か月ほど後の三十一年二月四日に、一葉の母親(滝)が六十五歳で世を去った。昭和二十八年になって樋口家から一葉と母の香典帳が発見された。その中に両方とも坂本(渋谷三郎のこと)の「壱円」が記されている。和田芳恵氏の文章によると、滝の没後、一葉の妹邦子は債鬼から逃れるため身を隠すようなこともしたらしい。そして、父の代からの書画骨董などを、一時渋谷(坂本)三郎の許へ運んだということである。[注15] 三郎は邦子からも頼られていたのである。

以上のように見てくると、三郎と樋口家との縁はなかなか深く、功利的な軽薄人とばかり三郎を見ては気の毒である。大藤村の一葉記念碑の除幕式で三郎のすわるべき席は、やはり親族席であったのかもしれない。

(注)

1　昭和四十七年五月刊『樋口一葉』・第一部　一葉が一葉になるまで—小説家の誕生・3—没落と背信

2　昭和四十一年刊　〈センチュリーブックス〉『樋口一葉』　清水書院

3　農民から幕臣に出世した真下専之丞を頼って江戸に出た甲州の人々は、真下を中心に義兄弟のような関係を作り、明治になっても親戚のように交際し、助け合っていた。渋谷三郎は、ずっと樋口一家に出入し、一葉や母の没後は妹の邦子と親しくしている。

4　「一葉女史日記の後に書す」(明治戊申執筆)・昭和十七年四月発表『樋口一葉研究』(新世社)所収

5　関良一氏の「一葉観の問題」(昭和三十一年発表)では、Ⓐ抒情詩人風に芸術派の作家とみる型、Ⓑ虚無的なリアリストとみる型、Ⓒ文明批評家肌の、人生派の作派とみる型、Ⓓ古風な、前近代的な、いわゆる last woman of old Japan とみる型、Ⓔはその逆に、進歩的な女性の先駆者と

みる型、また人柄をⓕ下町風のおてんばな、したたたかものとみる型、ⓖ士族の娘らしい、しとやかな山の手風のお嬢さんタイプとみる型に分けて紹介している。それぞれ一葉との接し方、男女の差によって一葉がいろいろの面を見せたのであろう。

6　昭和二十九年七月刊。

7　一時間文庫『樋口一葉』の「三人の恋人」の中で和田氏は、「許婚の間柄としての三郎に心の安住を求めていた期間と、それに継ぐ野尻理作への傾倒ののうちに、桃水の愛が来るのであって、この三人の中どのテーマをたてても、この「日記」と云う私小説は成立するだけの愛の内容を持っていた。」と書いている。

8　昭和三十一年十月刊。『樋口一葉研究』第六章　龍泉寺時代（中央公論社）

9　一葉は半井桃水を恋しており、桃水の弟浩と鶴田たみ子（半井家に寄宿中）がまちがいを起こして子を産んだのを、野々宮きく子が桃水の子だと推測して邦子に話したのを聞き、一葉はひそかに悩んだ。

10　明治二十五年九月一日の日記の一部。

11　真下専之丞

12　明治二十五年九月一日の日記の一部。

13　和田芳恵氏は「おそらく、相続人のなつとの結婚で、母とくにをいっしょに背負いこまなくとも済むような条件を出したか、学資を見てもらいたいという要求だろう。」（昭和三十七年十一月『講談社版　日本現代文学全集』一葉入門）と言い、塩田良平氏は「何事をさすかわからないが、樋口家の遺産に心をおいたのであろうか。」（『樋口一葉研究』）と言いっている。

14　三郎の学資は、姉の嫁ぎ先の北島秀五郎が出していた。（和田芳恵説）

15　昭和二十九年四月発表・和田芳恵『文学』（岩波書店）